

女性医師からのメッセージ

女性医師として

横浜市立大学リハビリテーション科は、所属医師のうち約半数が女性で、皆さん様々な分野で活躍されています。リハビリ科は生活をみる科ですから、女性が担うことが多い家事、育児、介護等の知識、経験が診療に生かされる場面が多く、また多職種様々な方との調整等が必要である点で、女性に向いている科と言えるのかもしれませんが。

働く女性にとって、仕事と特に育児との両立は難しい問題です。近年の核家族化、またライフワークバランスという概念が広まってきた時代の流れもあるのか、医師の中でも育児をなるべく自分でしたい（またはしなくてはいけない）女性が増えてきたように思います。しかし実際には、退職せざるを得ないという環境の女性医師の話も聞いたことがあります。その点当薬局は非常に理解があり、産休・育休取得を希望でき、また大学病院、地域急性期病院、回復期病棟、地域リハビリセンター、療育センターなど幅広い関連施設の中で、いろいろな働き方の選択肢があり、働くママにとっては非常に有難い環境です。

私も二児の子育て真っ最中です。産休・育休取得後、業務量を減らしていただき、みなさんにサポートしていただきながら、現在も働き続けることができています。正直、仕事も育児もこなせているとは言えませんが、今できる範囲のことを、できる限り続けていくことで、いつか何かが見えてくるのではないかと思って、諸先生方と家族に感謝しながら頑張っています。

平成 14 年入局

女性医師として

私がリハビリテーション科を選んだきっかけは、学生時代に横浜市総合リハビリテーションセンターを見学してリハビリテーションの世界を知ったことでした。何より人生そのものを相手にする仕事の面白さと奥深さ、そして生き生きと働く先輩方の姿、チームメンバーの幅広さと専門性の高さなど全てが魅力的でした。横浜市大の良さのひとつは公的機関であり、地域や行政とのつながりが深く、このことが地域リハシステムを作り上げる上で大きな意味を持っているものと思われまます。中途障害においては病院での急性期から地域での慢性期まで、先天性障害においては病院での新生児期から地域での早期療育および成人期以降まで、そして医療から就学/就労あるいは地域活動までと切れ目のないリハビリテーションを市内全域で追及できることは、横浜市でリハ医として働く大きな魅力です。

また、リハ医と療法士やエンジニア、義肢装具士、福祉職などとの関係の良さ、結束の固さも先輩方が長い間に積み上げてこられた貴重な財産と思っています。

プライベートでは私は3人の子供に恵まれています。産後2-3か月で復職し、搾乳しながら、あるいは子供の発熱時などには抱っこしながら働き続けてきました。そのようなことができたのもこの大切な仲間あってこそと心から感謝しています。たくさんの素敵

リハ医はもちろん、療法士の方々をはじめとするチームメンバーに本当に支えて頂きました。患者さんの変化と一緒に一喜一憂し、日々素晴らしい時間を過ごしてきました。これからもこのつながりを大切にして働き続けていきたいと思えます。

平成6年入局